阿蘇市
子どもの生活に関する実態調査
結果報告書（概要版）

令和６年３月

阿蘇市

Ⅰ．アンケート調査結果

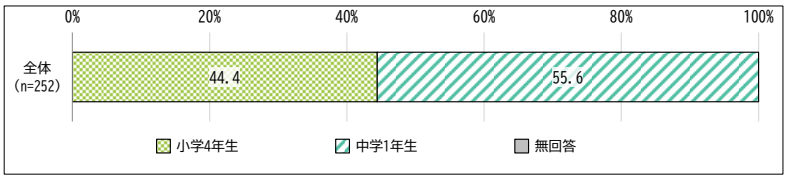
1.調査の概要

調査対象	阿蘇市在住の公立小学４年生・公立中学１年生の児童生徒 及びその保護者
調査方法	インターネットによる配布・回収
調査期間	令和６年２月
回収結果	小学４年生：配布数201件　有効回収数112件　（有効回答率　55.7%） 中学１年生：配布数184件　有効回収数140件　(有効回答率　76.1%) 保護者：配布数385件　有効回収数172件　(有効回答率　44.6%)

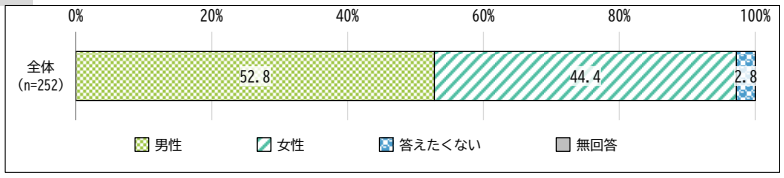
2.回答者の属性

調査対象者は、小学4年生・中学1年生の児童生徒で、小学4年生44.4%、中学1年生55.6%となっています。また、保護者は父18.0%、母80.2%と8割以上が母親が回答しています。

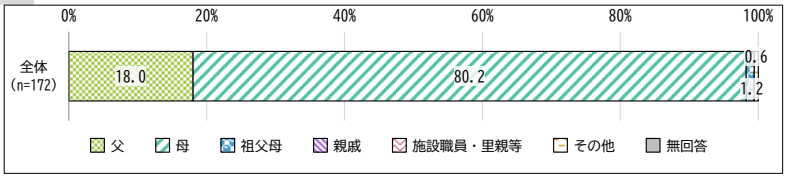
■児童生徒の回答者



■児童生徒の性別

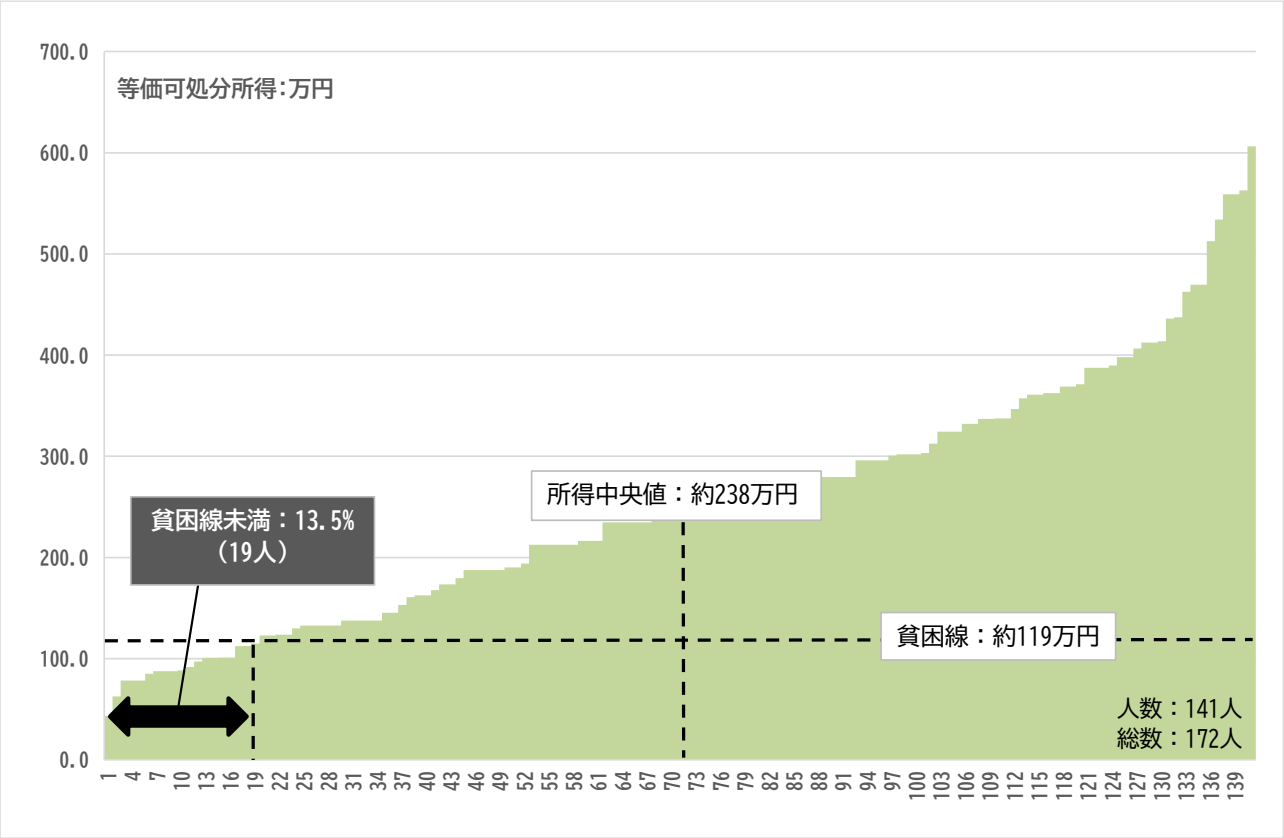


■保護者の回答者



3.相対的貧困の設定

＜相対的貧困世帯の状況＞



当該調査では、保護者向けアンケート結果により「相対的な貧困率」を判定し、貧困線を下回る層（13.5％）に属する回答者をⅠ層、それ以外の回答者をⅡ層と区分し、集計・分析を行っています。

〇世帯人員数

〇前年の世帯収入合計額

算出の結果、本市のⅠ層に該当する世帯は、有効回答者数 141 件のうち 19 件となり、回答者全体に占める割合は 13.5％となりました。

「ひとり親世帯」は有効回答者数 141 件のうち 28 件であり、全体の約 19.8％となっています。そのうち 25.0％がⅠ層と判定され、ひとり親世帯のおかれている経済的な状況が厳しいことがわかります。

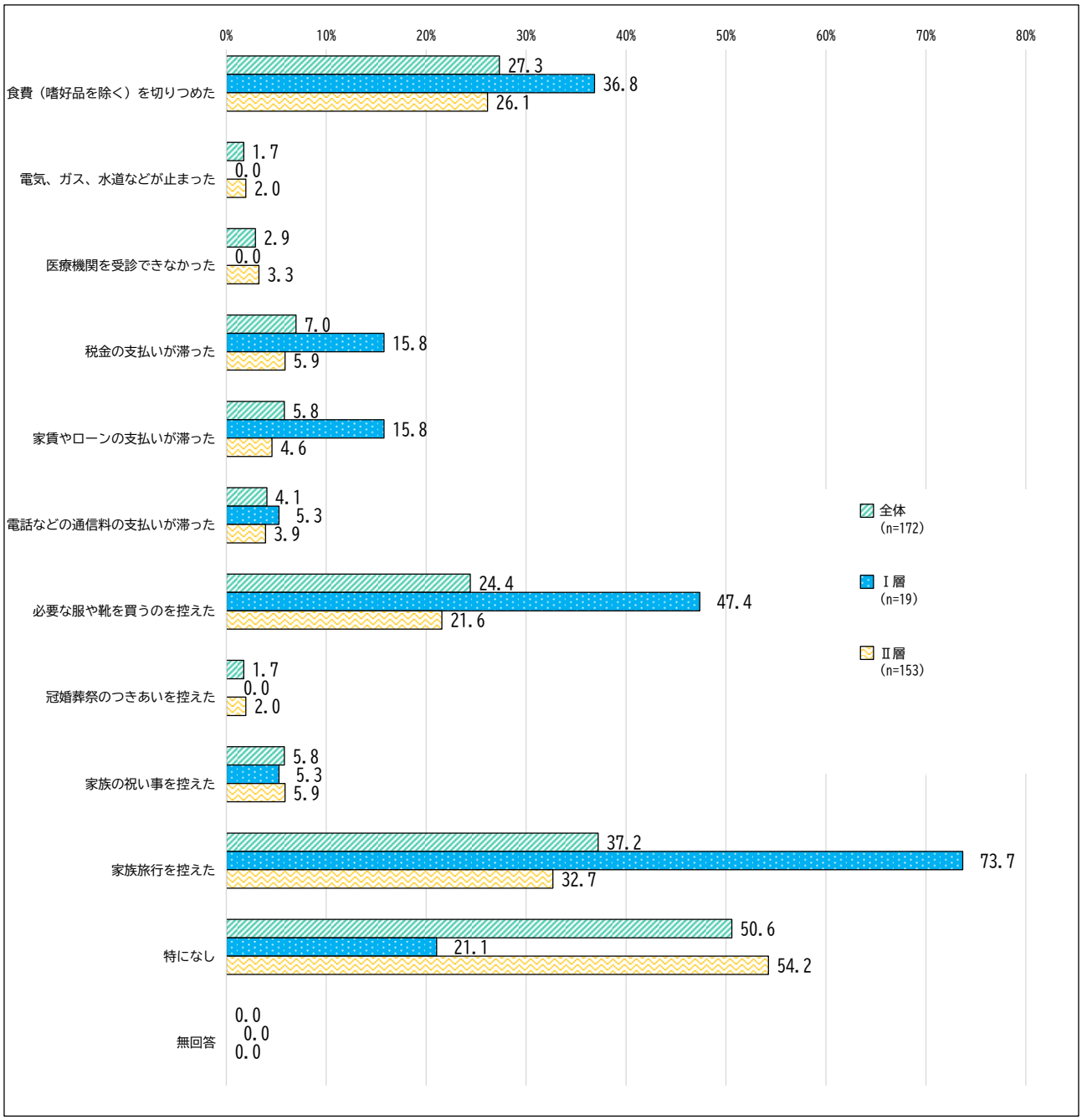
なお、今回の判定基準は調査結果分析のための便宜上のものであり、国が公表している相対的貧困率と比較できるものではありません。

4.主な調査結果

（１）経済状況について

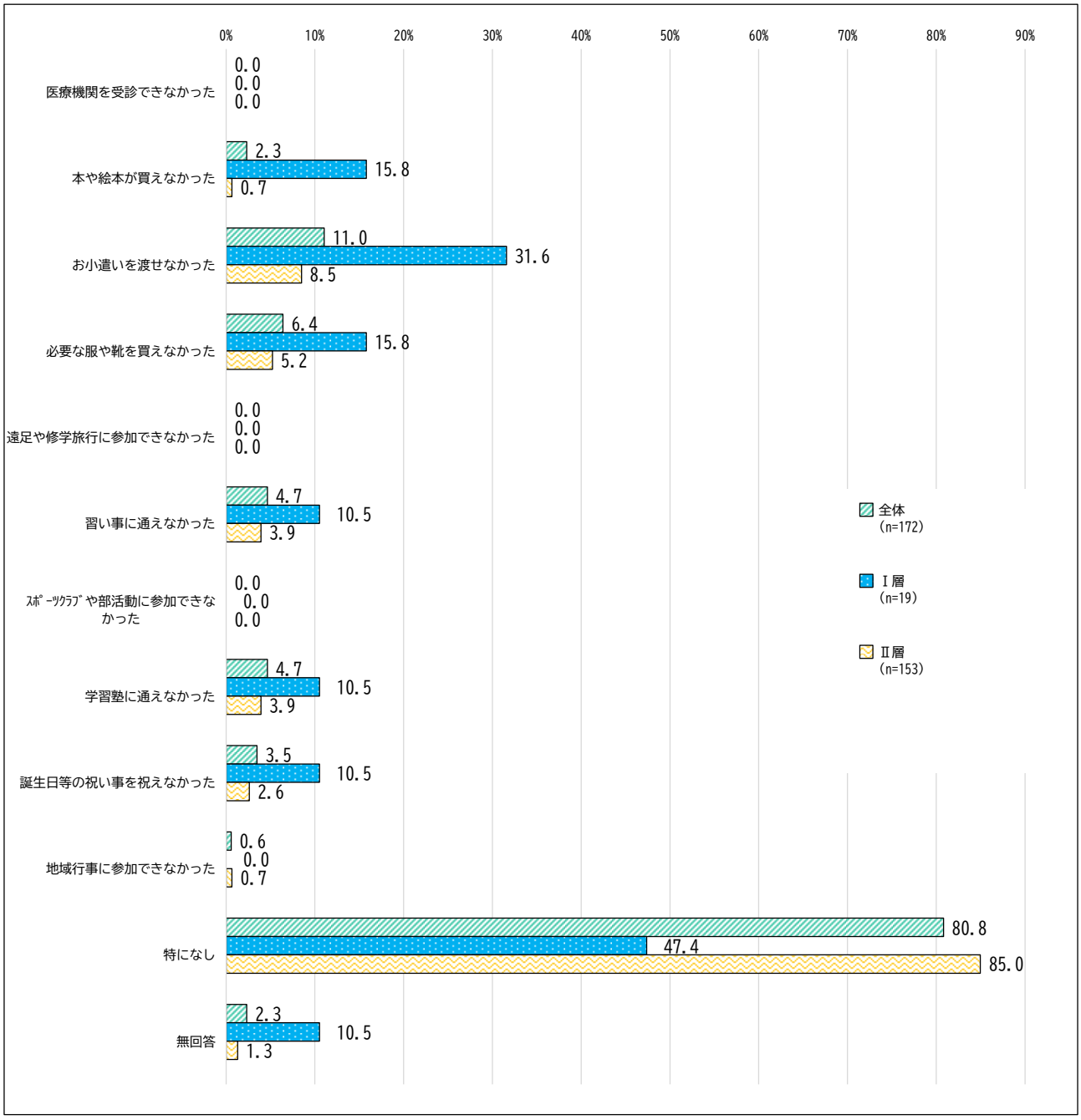
・経済的理由により経験したことについてⅠ層とⅡ層で比較すると、「税金の支払いが滞った」、「家賃やローンの支払いが滞った」、「必要な服や靴を買うのを控えた」、「家族旅行を控えた」の割合の差が大きくなっています。

■世帯での経済的理由による経験（保護者回答）



・子どもが希望したにもかかわらず、経済的理由により経験したこととして、「お小遣いを渡せなかった」（Ⅰ層　31.6%：Ⅱ層　8.5%）、「本や絵本が買えなかった」（Ⅰ層　15.8%：Ⅱ層　0.7%）、「必要な服や靴を買えなかった」（Ⅰ層　15.8%：Ⅱ層　5.2%）の割合が高くなっています。

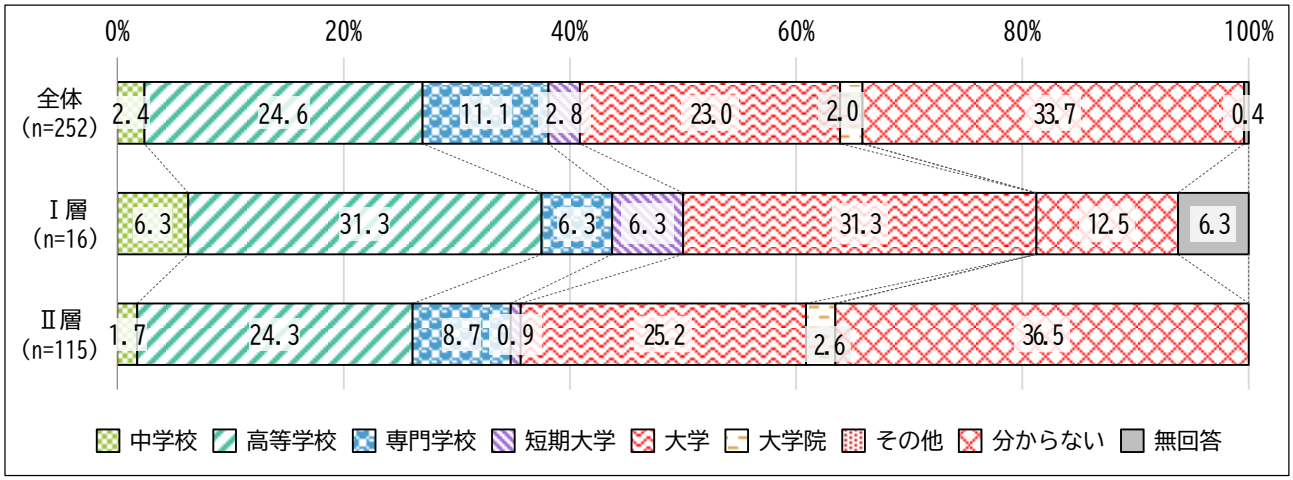
■経済的理由による子どもの希望に答えられなかった経験（保護者回答）



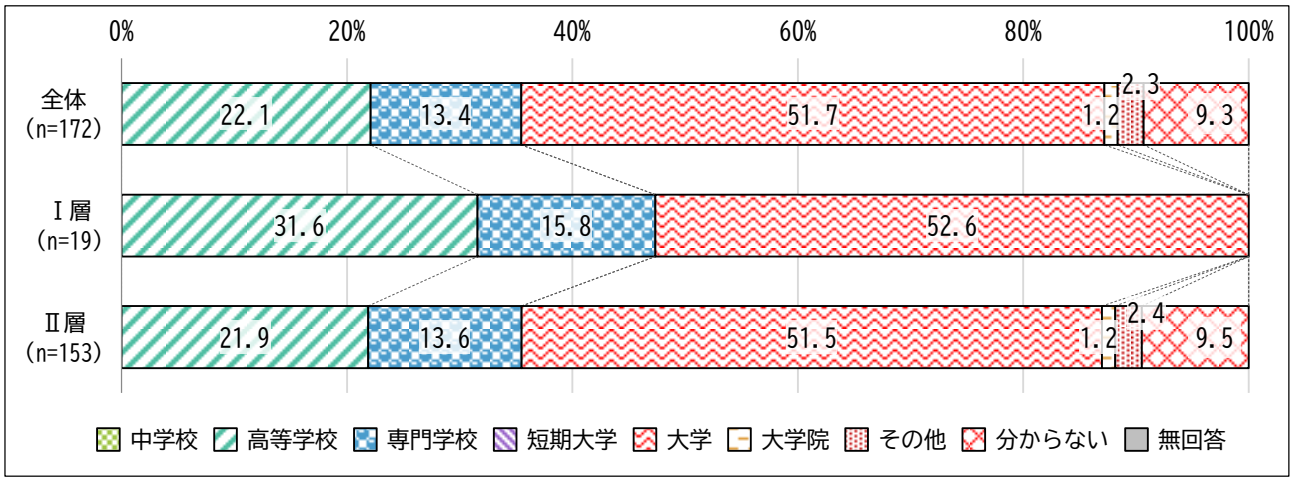
（２）子どもの教育環境について

・子どもの進学について保護者の考えは、「大学」までが 51.7%と最も高くなっています。
・一方、子どもの進路希望については、「分からない」が 33.7%と最も高くなっており、進学について迷っている様子が伺えます。

■どの学校まで進学したいか（子ども回答）

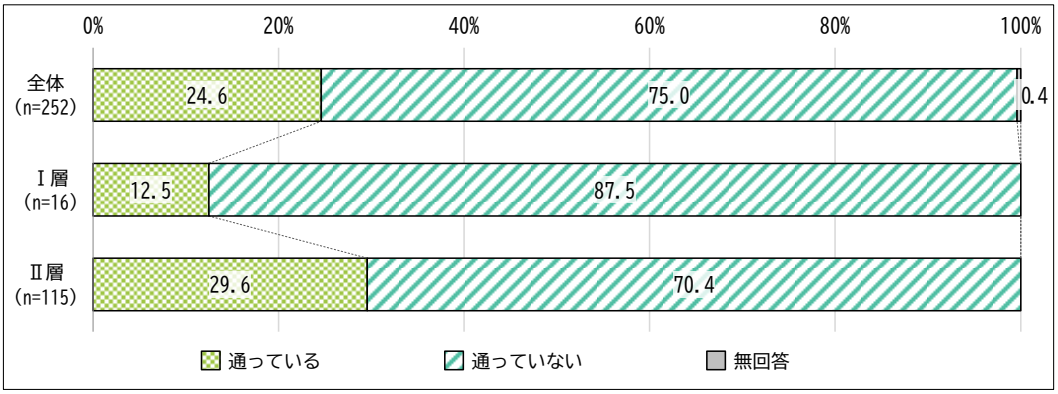


■子どもをどの学校まで進学させたいか（保護者回答）

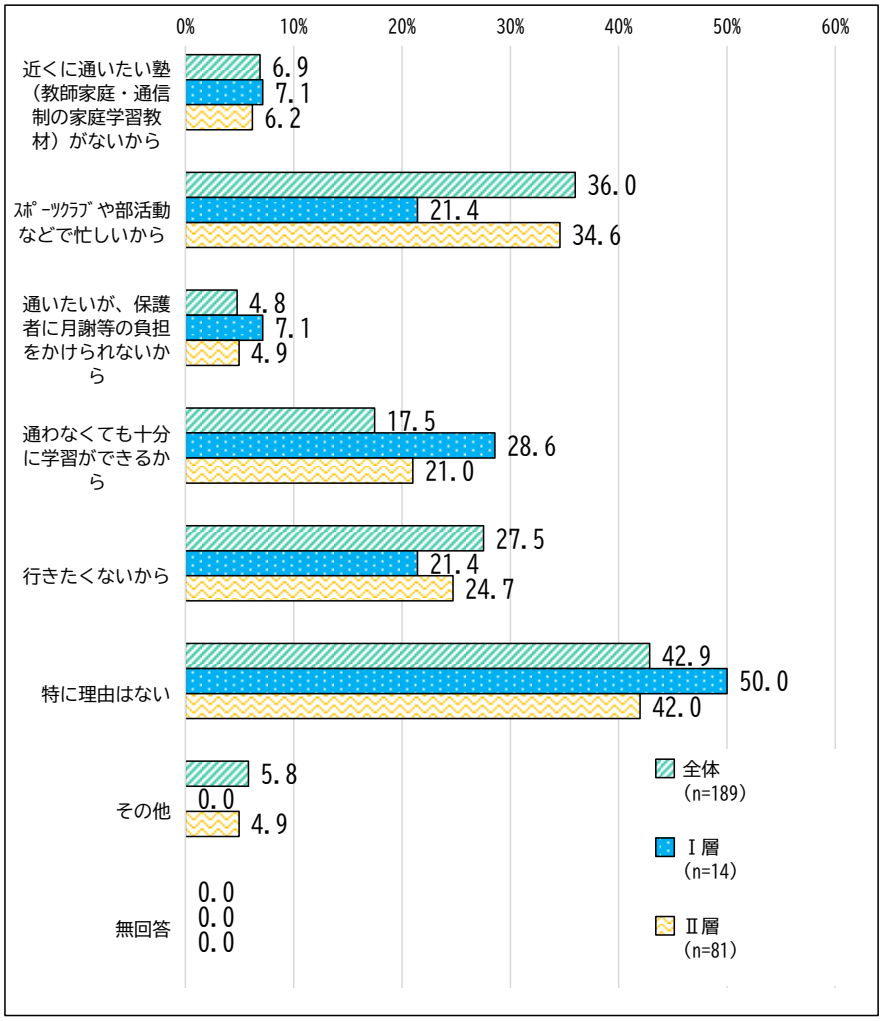


・学校以外での勉強として塾等（家庭教師、通信制の家庭学習教材）に「通っている」割合は全体で 24.6%となっています。Ⅰ層とⅡ層で比較すると、Ⅰ層の方が 17.1 ポイント低くなっています。
・「通っていない」理由としては「特に理由はない」がそれぞれの層で４割以上となっていますが、Ⅰ層で「通いたいが、保護者に月謝等の負担をかけられないから」が 7.1%となりⅡ層の子どもより高くなっています。

■塾等での勉強（子ども回答）



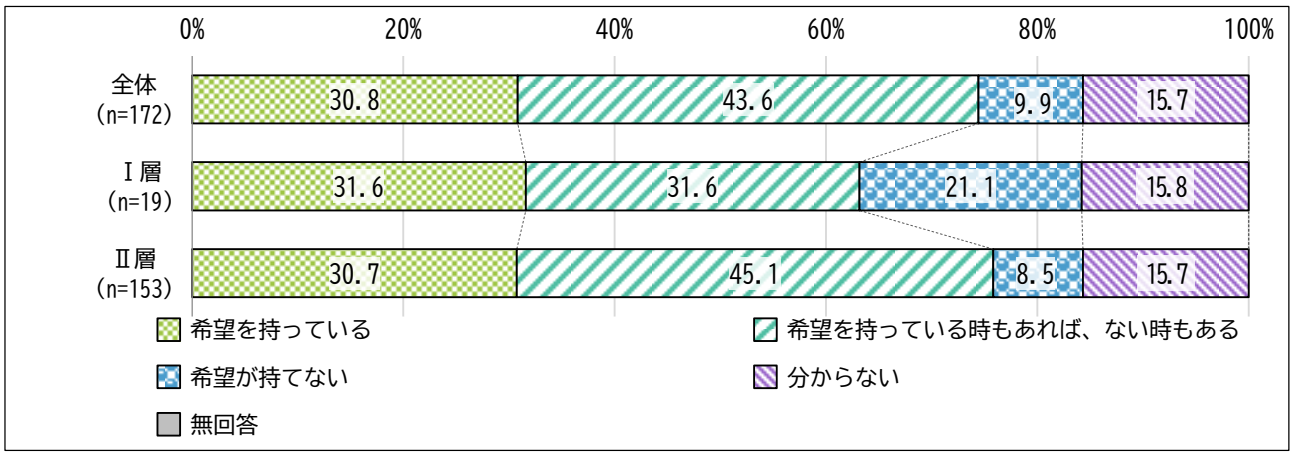
■塾等に通っていない理由（子ども回答）



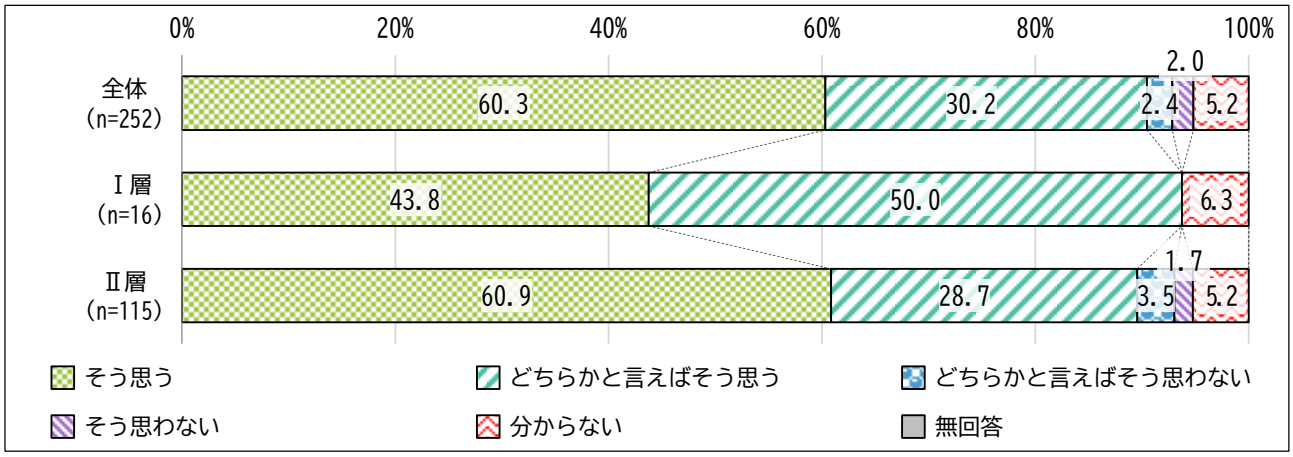
（３）社会環境について

・Ⅰ層の保護者において、将来に前向きな「希望が持てない」割合が高くなっています。
・Ⅰ層の子どもにおいて、将来のために勉強等を頑張りたいと思う割合が低くなっています。

■自分の将来に対して前向きな希望を持っているか（保護者回答）

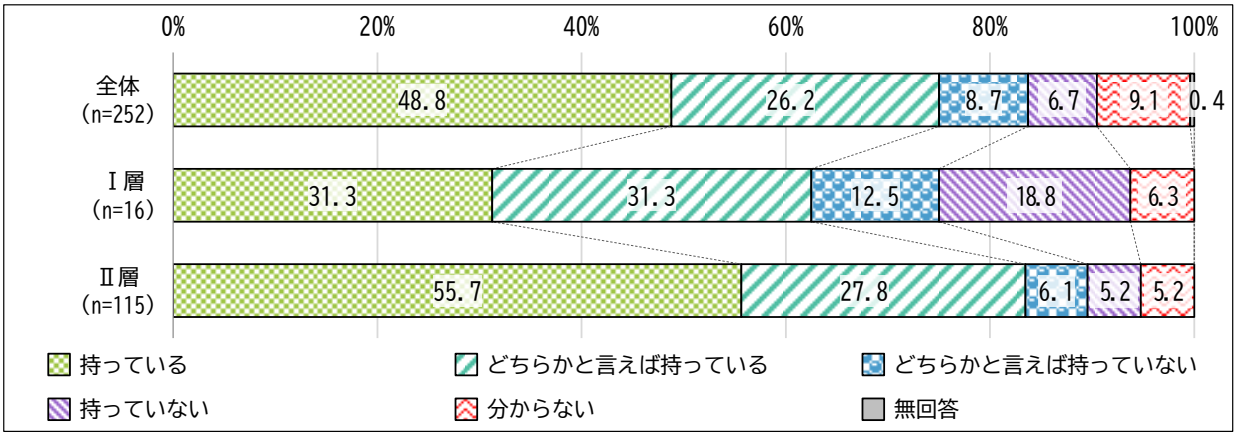


■将来のためにも、今、勉強やスポーツ等を頑張りたいと思うか（子ども回答）

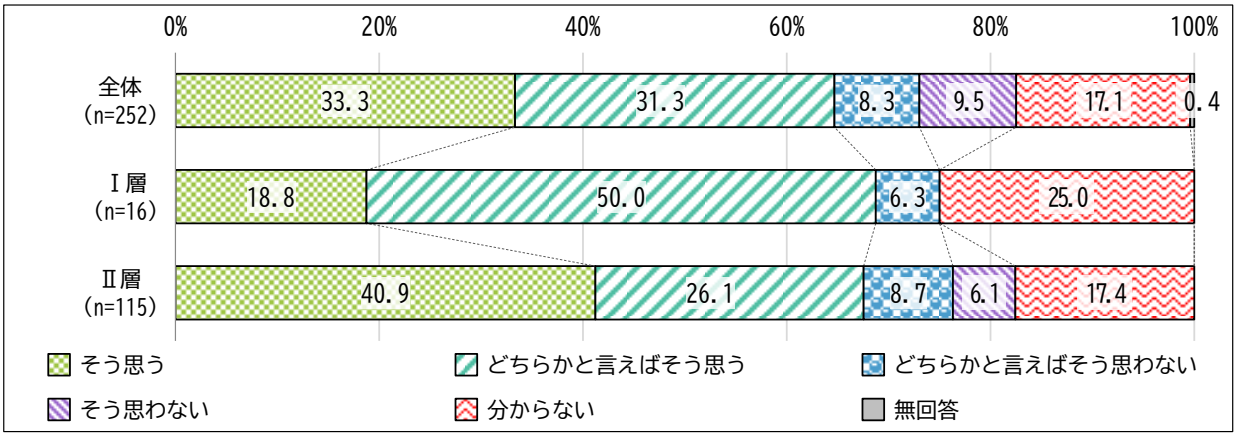


・Ⅰ層の子どもにおいて、夢・希望や目標を持っている割合が低くなっています。
・Ⅰ層の子どもにおいて、自分には良いところがあると思う割合が低くなっています。

■将来の夢・希望や目標を持っているか（子ども回答）



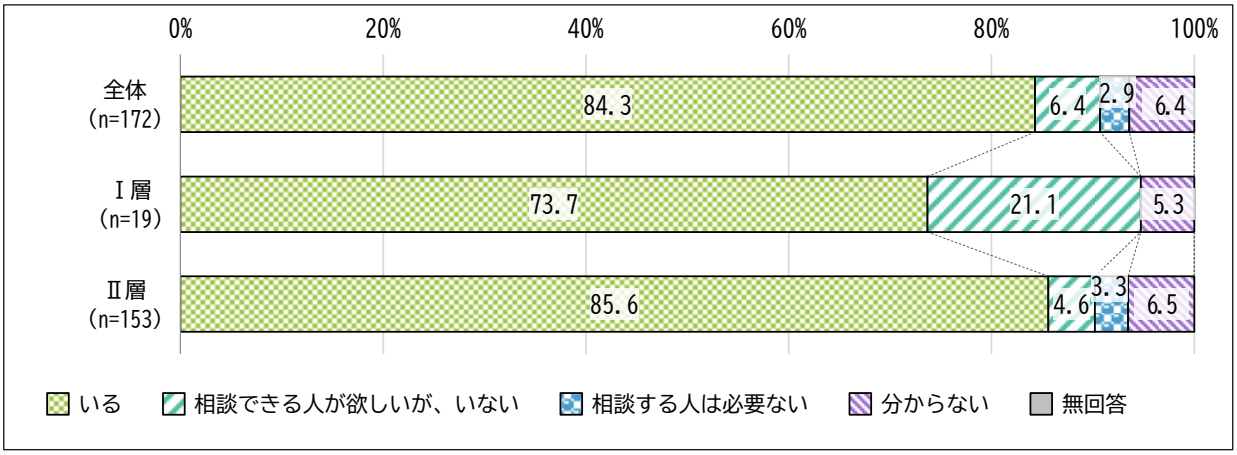
■自分には良いところがあると思います（子ども回答）



（４）相談について

・Ⅰ層の保護者において、悩みや子育ての相談などできる人がいる割合が低くなっています。

■悩みや子育ての相談などできる人はいるか（保護者回答）



Ⅱ．団体等ヒアリング

1．調査の概要

調査対象	地域まるく食堂
調査方法	対面式による代表・職員へのヒアリング調査
調査期間	令和６年２月26日（月）09時30分～

2．調査結果

1　子ども食堂利用者の背景にある問題・課題

■スタッフの負担・確保の現状

回答
保育園を運営しているため、給食をされていた方で引退された方にお願いしメインで食事を作っていただき、職員もお手伝いしている。 配膳する人についても職員の親等に相談したところ、快く引き受けていただいた。たくさんの人を入れると食材が不安定になるので、健康チェック、エプロン、手指消毒、三角巾等衛生管理をして検食をとり、専門分野なので専門の担当 5～6 人で調理を行う。いろいろな子どもたちがいるため、そちらはボランティアで対応し、お礼として 2 日で 3,000 円支払っている。具合が悪い人は施設内に入らないこととしている。 流れとして午前中は調理、午後から配膳、15 時半から配食となっている。ご飯を炊いて午前中に仕込みが終わり、昼から備品等の消毒を行い、お弁当に詰めていく作業を行う。15 時半頃になると皆さんお弁当を取りに来られる

2　（活動の中で感じた）子どもの健やかな成長における課題

■月１回（奇数月は２回）の実施の中で、子どもの変化

回答
配膳する人も最初は手探り状態だったが、配り手、受け手の雰囲気は良くなった。子どもたちは保育園に通っているので毎日顔を見られるが、保護者はお弁当を取りに来るときにしか会えない方もいるので、お弁当を渡すときに会話が広がり、表情を見ることで子育ての悩みを抱えているか知るきっかけにつながる。月 2 回のふれあいだが段々打ち解けてこられ、端々に「実はこうなんだ」というような会話もあり、そこで出会ったお母さんたち同士の会話もある。子ども食堂のことは口コミで広がっていったと思うが、最初は申し込みに躊躇していたお母さんたちに他の保護者から「こういった活動がある」と言ってもらい、利用する方が増えていったと思う。声をかけたいと思うお母さんに対しては、ママ友同士で子ども食堂のことを伝えてもらい、利用が増えていると感じている。 近年は児相からも電話があり、ネグレクトや夫婦仲が良くないなどの話がある家庭のことを聞いた際は、子ども食堂を利用している時の様子や内容を伝えている。 ママ友同士でお互いに頼り合い、応援しあっているとの話もあり、申し込みの有無にかかわらず電話でお弁当の出来上がりを伝えることで会話のきっかけができる。子ども食堂に来られた際には物品、食材の不足の確認、米の提供があった時の配布などの話ができるため、保育園だけではできない人間関係が作れる。子ども食堂に寄付されたものをバトンタッチしているだけだが、そこで生まれる会話は濃いものがある。

3　「こどもまんなか社会」のイメージと取組み

■「こどもまんなか社会」のイメージ

回答
「こども大綱」を県単位で作成していくとのことで、アンケートも見て、一番変わったのが「結婚観」である。結婚している人の 6 割がマッチングアプリで出会っているという調査結果から、時代が変わってきたと思う。結婚で弊害になっているのが結婚相手の両親との付き合いだという。そういった中で子どもがまんなかになりえない社会になってきていると県のアンケートを見て思った。密集地で今の保育ができるのかというと中々できないと思うし、給食の臭いで苦情が出る自治体も多いと聞く。子どもにとっていい面もあれば悪い面もあり、騒音問題も落ち着いてはいない。子どものための取組だが、地域や周囲が望まない行為にも柔軟に対応しなければならないので、こども大綱が掲げる「こどもまんなか社会」の理念を持つだけでなく、お互いを尊重し、協力し、共に成長することができる社会が望ましい。 阿蘇市のように民生委員が登下校の際に道路に立つなど、子どもの通学等の手助けをしないといけない。自転車のヘルメット着用や交通ルールの順守なども中々守れなかったり、お年寄りに席を譲らないなど、いろいろな子ども達にアプローチできるような社会になっていかないといけない。そういう意味では、これまで子どもたちにとって経験の場だった子ども会などで大人が自分の姿を見せていくことがなくなったことも原因の一つであると思う。 近所の方達も声をかけることに抵抗があると思う。子どもをまんなかとして、皆で子どもを育てていこうという思いはあるが、社会から不審者扱いされたり、大人が注意をしても不適切と言われることなどが国の思いに反して地域の方達から子ども達を遠ざけているのではないかと思う。本当は地域で子どもを見守り、皆で子育てしていると伝えたいが、それができない世の中に変わっていっていると思う。相談相手がいない中で孤立していくお母さんが増えていくのではないかと思う。

4　見聞きした範囲や経験で）他市町村にある施設やサービスで阿蘇市でも取り入れたほうが良いと思うものがあるか。

■他の自治体や子ども食堂で行っているサービスをとり入れたいこと

回答
フードバンクのような取り組みは、基本的にその場所にいないとできないと思う。色々な広がりの中で、各取り組みを繋ぐこともできればやっていきたいと思う。阿蘇にはまだそういった基地局のようなものがないので、そういったものがあれば子ども食堂も増えていくと思う。食材をとりに行くことも大変。子ども食堂の取り組みは、SDGs の一環として、社会全体が子どもたちを「まんなか」に据えることを目指している。この流れに沿って、基地局のような取り組みを実施してみたいと思う。

5　その他、意見交換

■ご利用者から聞く声

回答
普段お弁当をもらいに来た際、こういうものがあると助かるという声や化粧品の配布はお母さん方にとってもメリットがある。お母さん達は毎日ご飯を作っているので、子どもにお弁当を食べてもらってその日はお休みできるなどの話を聞いたり、普段食べない食材もお弁当だと食べたという声があった。スーパーで買わない菊芋（キクイモ）などの珍しい食品も頂くので、お母さん達と話して調理方法を調べている。 子ども食堂のイメージは最初は良くなかったと思う。家庭によっては「うちの家庭は違う」と言われる状況もあったが、今はみんなが気軽に利用できるところになってよかったと思う。 最初は食材ではなく、飲食店からの既製品の提供があった。小学校の掲示板に貼ったり、連絡帳へチラシを入れてもらったりして告知し、その際 100 食ほど配食したとのことだった。その後も食材の提供やレトルト食品を学童で配布した。提供元は品物の調達を行い、地域まるく食堂から配布してもらうようにした。

子どもの生活に関する実態調査

結果報告書

概要版

令和６（2024）年３月

発行　阿蘇市　福祉課

〒869-2695

熊本県阿蘇市一の宮町宮地504番地1

TEL　0967-22-3167／FAX　0967-35-4114